

令和7年度第2回 京都市図書館協議会摘録

● 開催日時

・令和8年3月16日(月)10:00～12:00

● 開催場所

・京都市生涯学習総合センター(京都アスニー) 3階 会議室

● 出席委員(10名中7名出席)

・岩崎 れい 委員

・後藤 由美子 委員

・岡本 卓也 委員

・山崎 信夫 委員

・佐々木 美緒 委員

・澤田 瞳子 委員

・道又 隆弘 委員

● 傍聴者

・なし

1 開会

中央図書館長のあいさつ

開会の挨拶

毎年のことだが、図書館が外部の意見を賜る唯一の場なので、よろしくお願いします。

図書館はある意味では古臭い制度のように思えるが、知識を得るということは本を読むということであり、これは長く続いている形であるが、知識に対するスタイルが刻々と変わりゆく中で、せめぎあいが問題になっている。その知識に対するせめぎあいの問題になっているのが図書館である。とりわけ、中央図書館で衝立のある座席で壁に向かって読書をしている姿はまるで壁面万年の達磨大師のようである。ひたすら壁に向かい続けるうちに達磨は脚を失ってしまうが、そう考えるのは楽しいものではある一方で、これでよいのかと思う。先日、衝立がある座席を全て大きな一つのテーブルに代え、向かい合いながら本を読むことは可能ではないかと考えた。こうした新しいスタイルをいかにして京都の図書館で実施していくのかを、私は皆さんと同じように思い悩んでいる。皆さんはその検討のための大きな助っ人である。是非、忌憚のないご意見をお願いしたい。本日はよろしくお願いします。

2 協議事項

(1) 令和7年度新規事業

① 市民意識調査の結果

② 京都市図書館における居心地の良い空間創出事業の結果

● 協議事項「(1) 令和7年度新規事業」に関する説明

説明

年度末ということで、今年度の取組の報告と来年度の取組の紹介を、掻い摘んで説明させて頂き、皆様からご意見を頂きたい。

資料1 市民意識調査報告書

今年度、新規事業として、図書館に関する市民意識調査を業者に委託し実施した。この資料には細かいデータが並んでいる。説明していくと長くなるので、掻い摘んだものを資料2として用意している。これは具体的に分析をかけたものであり、図書館の状況や市民のニーズを説明する。

資料2 市民意識調査のまとめ【暫定版】現状の京都市図書館の評価

『図書館での過ごし方』

「自分のために本を選ぶ」であったり「読書」「調べもの」「子どものための本を選ぶ」等々、いわゆる図書館で本を読んだり借りたりするという従来の利用が京都の図書館では多い、という結果であった。一方で「くつろいで過ごす」や「特に目的はないが図書館で過ごす」という声は少数で、サードプレイス的な利用はまだ少ない。

『その図書館をよく利用する理由』

「家から近いから」が断トツに多く、次が「学校や職場など普段の生活圏にあるから」が多く、自身の生活圏内にあることが図書館を利用する主な理由になっている。京都市の図書館は20館あり政令指定都市の中でも多いほうであり、身近な地域図書館が丁寧にサービスを提供できていると考えられる。サードプレイス的な利用で見ると、「雰囲気が好きだから」「本の提案があるから」、「座席数が多いから」などは少なく、この辺りが課題と考えられる。

『図書館を利用しない理由』

「普段の生活圏にないから」が多く、図書館を利用するに当たって、身近にある、生活圏にあるということは重要なポイントであると考えられる。また、10代から30代において、「自習が出来ないから」というデータが挙がっていることも留意すべき事項である。

『京都市図書館の設備についての印象』

京都市図書館は狭隘で設備の老朽化が進んでいる状況で何とかしていきたいという思いは強く持っているが、市民の皆様の意見の結果としては、思いのほか低い評価ではなかった印象。そうした中「閲覧席の数が充実している」の項目が、『そう思わない』が断トツに多く、『そう思う』が少ない結果であり、これは大きな課題である。「全体的にきれいで充実した印象を受ける」「トイレが清潔である」「館内の雰囲気や居心地がよいと感じる」「本棚の配置がゆったりしており本の展示に工夫がある」も、『そう思わない』の数値が高いことを、意識していく必要がある。

『図書館の設備で優先して改善してほしいこと』

「雰囲気や居心地の良い空間づくり」「トイレの清潔さ」「館内の清潔感」といった、居住空間の改善ということが大きなニーズとして表れている。若い世代からは「閲覧席を増やしてほしい」「Wi-Fi環境を整えてほしい」という声もある。

『行ってみたい図書館』

年代別のクロス集計をしているが「どの世代でも、席がたくさんありゆったりくつろげる」「特に目的がなくてもふらっと気軽に立ち寄れる」図書館がほしい、という声がある。若い世代では「みんなが自由に学べる自習空間」「コーヒーやサンドイッチを食べたり飲んだりしながら本が読める」「学生や若者が気軽に集える」図書館がほしいという声がある。

『行ってみたい図書館の内容』

図書館を利用していない方に伺ったところ「特に目的がなくてもふらっと立ち寄れる」、「席がたくさんありゆったりくつろげる」「コーヒーやサンドイッチを食べたり飲んだりしながら本が読める」といったニーズがある。

『図書館に新たに導入を検討してほしいサービス』

自習ニーズがかなり高く、その他、デジタル化ニーズとして「駅やコンビニ等の図書館以外での予約本受取」「自動貸出機」「無人の予約本受取コーナー」等、他都市でこれらの取組が進んでいることもあり、導入を望む声があがっている。ちなみに、自動貸出や無人の予約本受取を実施しようとする IC タグを本の中に入れて自動読取機を導入する必要があり、費用的には数億円が必要になる。しかし、ニーズとして必要であれば、予算要求していく必要もあると考える。

『複合化してほしい・してほしくない機能』

「カフェ、飲食店」は断トツで強いニーズがある。一方で相反するニーズも出ており「子どもの遊び場」「スーパー、コンビニ」「シニア世代の健康増進施設」は、『複合化してほしい』『複合化してほしくない』が、どちらも高い数値となっている。「子どもの遊び場」「スーパー、コンビニ」は音が出るという印象があるため、敬遠される方が多いのかと思う。現在、ラクト山科で子どもの遊び場と図書館の整備の計画が進んでいるが、音のゾーニングを意識しながら検討を進めたい。

『自由記述欄における主な声』

印象的であったのは、例えば「その日の目的を図書館とできるくらい、一日中家族で過ごせる施設にしてほしい」という声。確かに、京都市のなかに、天候がよいときは公園等に外出できるが、悪天候のときに子どもを連れて一日中滞在できる施設がどれだけあるかという点とあまりない。そういう意味では、図書館がそのような空間になっていくのも良いのではと感じる。また、「好きを探す場所、好きに出会う場所、好きを考える場所、好きを学ぶ場所、好きでつながる場所、好きから始める場所になってほしい」という声があり、図書館がそのようなコミュニティの中心であるような場になってほしい、という声もある。他には、ゾーニングに対する声や、現在の図書館に対する意見では、「現在の図書館は暗いイメージしかない。入口から既に暗いので建物の印象も良くない。看板や案内表示を変えるだけでも印象は変わる」という声や、「図書館＝堅苦しいというイメージをなくしていくことが重要では」「今の図書館に必要なのは図書館への敷居の低さではないか」という声があった。我々が考えている以上に、図書館に対し敷居が高かったり堅いという印象があるので、この辺りも意識する必要がある。

資料3 京都市図書館における居心地の良い空間創出に係る試行実施委託に関する報告書

資料4 図書館における空間創出事業

(資料4)

左京図書館では、ファンミーティングを行い、そこで出たアイデアを基に、館内でコンサートを実施した。

中央図書館では、雑誌コーナーを居心地の良い空間に改修し、ピロティでイベントを開催。また、後述するが図書館のなかに自習空間を設置した。

右京中央図書館では、居心地の良い空間を創出し「みんなの本棚」を設置した。これは、図書館の本を市民がそれぞれ選書して棚に配架しその本を貸し出すことができるもので、一箇月間取組を続けた。個性的な本棚がたくさん並びとても賑わった。その横に「ゆるコミボード」として、高校生のアイデアだが掲示板を設置してコミュニケーションが取れる図書館にしようという試みで、天井から床まで壁一面にホワイトボードを設置したところ、たくさんの書き込みがなされた。面白いのが、おススメの本の書き込みに対し、その作者なら私はこの作品が好きだとか、さらにそこから派生してこんな本もおススメですよなど、デジタルによるコミュニケーションではなく、図書館内で実際に目に見える形でコミュニケーションが広がるというのが面白いと感じた。

岩倉図書館では、中学生も参加のワークショップを開催し、中学生から、図書館で自習をさせてほしいという声があがった。そこで他の曜日よりも閉館時間が遅い(～19時)木曜日限定で、夜の時間を活用した「木曜日の自習室」という取組を中学生と一緒に企画し、実施した。

その他、各館で様々な取組を実施しており、報告書をまとめているところ。

(資料3)

中央図書館のピロティで実施したイベントにおけるキッチンカーの運営者の声をご紹介します。図書館に出店するメリットはどのようなことがあるかという設問に「観光客は1回きりが多いが図書館の利用者は継続的に利用してもらえる可能性がある」「単純な売上だけではなく地域やコミュニティへの何らかの価値提供を考えている人向けの出店場所である」「多様な方と交流できるので新しい縁も増えて、図書館で実施される企画の内容なども知ることができ、イベント開催時にもっとコラボしても面白い」などの声があった。まとめとして、図書館が地域経済と交流を促すプラットフォームになる可能性が示された。今後も図書館と教育委員会、地域のつながりを一層高めていくことが大切であり、出店のガイドラインを作るなどして、より参画しやすい状況を作ることも提言されている。

広報については、インスタグラムを活用した情報提供を受託者に取り組んでもらった。フォロワー数は、現在250程度だが、過去90日間でのビューが多かった投稿は1,500件を超えるものもあった。チラシを配付するだけでなく、特に、若い世代を図書館に呼び込むためにはSNSを活用した広報もこれからは重要である。

空間創出に関する利用者からの意見として、左京図書館で「今後も続けてほしい」、中央図書館と右京中央図書館で「図書館のイメージが変わった」といった回答が多く、概ねポジティブな意見をいただいた。具体的なニーズとして、学習や作業に集中できる環境、自習室やWi-Fi環境を整えてほしい、という声を多数いただいた。「くつろぎ」や「カフェ」機能の追加を求める声の他、子どもが気兼ねなく過ごせる空間、具体的には、子どもが走り回ったり声を出すと他の利用者に迷惑

になるのではないかと緊張してしまうという声があり、その辺りをどのようにケアしていくのかということも大切である。その他「本を介した交流・体験への期待」ということで、交流機能を重視している市民の方がたくさんおられた。

図書館司書との振り返りも行ったが、司書も概ねポジティブな印象を持っていただいた。これまで見かけなかった30代から50代のかたの姿があったり、親子連れや若い世代の利用が増えたり、目に見える変化もあり、居心地がよくなった、図書館が変わろうとしていて嬉しいという声もあった。一方で、安全性やゾーニングをしっかりとしてほしいという声もあり、この辺りは今後の重要なテーマと思う。

最後に、各図書館の特色や強みを基に、まちの文化、地域のコミュニティ活動などと連携していくことができれば図書館の存在は単なる「知の拠点」から「まちの拠点」へとシフトしていけるのではないかとまとめられており、今回の結果をしっかりと意識しながら、こうしたエビデンスを基に、来年度、新しい図書館の構想を描いていく予定である。

資料5 中央図書館自習空間「リブスタ」の開設について(報告)

中央図書館において「リブスタ(LIBRARY STUDY)」という名称で図書館内における自習空間の試行実施を、中学校・高校のテスト前となる11月26日から8日間行った。この取組は17時で閉まる中央図書館1階の児童書コーナーを20時まで中高生限定で自習スペースとして開放するもの。毎日一定の利用があり、最終的に34名の中高生に利用していただき、とても好評を得たため、継続できるなら今後も継続していきたい。長くなったが説明は以上。

意見

ありがとうございました。それでは委員の皆様から意見を伺いたい。いろいろな取組が提言されているので、例えば京都市の図書館はこういう方向に行く方がいいのではないかと、あるいは、イメージとしては良いけれども具体的にはこのような課題があるのではないかとといったような、できるだけ実際の取組につながるような意見をいただけるとありがたい。

意見

今年度、本当にたくさんの事業に取り組んでいただいて、感想の中に京都市図書館が変わろうとしていて嬉しいという声があったが私も嬉しく思っている。図書館は施設が狭いなど様々な制約がある中で、いろいろ大変だったと思う。限られたスペースの中で、どうやって事業をしていくのだろうと思いながら、私もいろいろなイベントに参加した。いろいろな世代の方が来てくださっていたことはとても良いことだと思った。私は右京中央図書館で実施された「みんなの本棚」に参加し、わらべ唄の本を特集して並べさせてもらった。自分が参加するということがすごく楽しいということと、人とつながれるので、いつも以上に図書館に行った。自分の並べた本が借りられていると嬉しい。子どもさんも「みんなの本棚」に参加していて、多様な年代の人が本に関わっていることが嬉しかった。また本棚の横の「ゆるコミボード」に本の感想とかを書いてくれたので、とても面白いと思った。一方で、図書館内でコーヒーを飲むのはどうかという思いはある。コーナーを別に設置するなど、配置の工夫は必要かと思う。

意見

「ゆるコミボード」に関してはとても良いと感じた。図書館はインプット情報ばかりだが、見たり読んだりしていると発信したくなるという部分、その部分がゆるコミボードで手書きで行えるというのは、望まれるのではないか。一方、Wi-Fiを整えてほしいという声については、何に使うのだろうかと感じた。単純に声があるから整備するようなものでもないと思う。閉ざされた空間であってもよいという考えで、インプットとアウトプットができる空間を演出してもよいという気はする。

回答

Wi-Fiに関しては、我々も議論するが、おそらくはファストフード店でも当たり前 Wi-Fi が使えてそこで自習や仕事をする人達が、自らのギガを使わなくて済む、という発想をそのまま図書館に当てはめているのではないか。そこに滞在したいという思いもあると思う。現状の図書館は狭隘なので滞在してもらえるスペースはそれほどないため、そのあたりも念頭に入れて考えなければならぬ。

意見

アンケートの結果について意外と京都市図書館に対する悪い印象がなかったということであったが、私は以前からそこまで悪い印象はなかった。いろいろな図書館に行かせてもらっているが、それぞれ一生懸命にケアやメンテナンスをしており、そこまで卑屈になる必要はないと思う。むしろ、細やかに市民の生活圏に溶け込めていることはポジティブに受け止めてもよいのではないか。Wi-Fiに関してだが、今の中高生はタブレット学習が普及しているので Wi-Fi がないと学習が進められないという面もある。もし、自習室を増設するのであれば、ある程度時間を区切るとか制限をかける必要はあると思う。今の学習形式の変化のなかでは、図書館を自習スペースとするのは切り離せない部分と感じる。一方でアンケートでは、「席がたくさんある」といいとか、「くつろぎたい」という意見が多いが、それと同じくらい「たくさんの本がある」ということも重視しなければならない。滞在時間が長い人もいれば少し立ち寄って帰る人もいるなど様々な使い方をされる人がいるが、本の存在というのは大切。特に京都市の中央図書館は専門書もたくさん置いており、蔵書が少なくはない。座席数と蔵書数のバランスは、とても難しいとは思いますが、バランスをとっていただければと思う。滞在時間は二極化しており、学習する人は長く滞在するし、本を借りるだけの人はさっと帰る。サードプレイスを目指すなら長い滞在型となるし、さっと来てさっと帰る場合、それは貸し館だけの機能となり難しい問題ではあるがその部分のバランスは大事。出版のほうに目を向けると、今、本というものは、読書はちょっとお洒落という印象が広がっており、ひとつの流行になりつつある。昔のように誰もが本を読む時代ではなくなってきているからこそ、読書が好きな方はとてもめり込む。好きなものを発信したり、好きなものを薦めたり、貸し棚のように自分で本を選書して借りられたり、売ったりするなど、本に対する発信をしたい人達、そういった人達と相互関係になっていくとさらに面白い試みができると思った。

意見

アンケートについて気になったのは、図書館を利用する・しないの理由が、普段の生活圏にならぬから、家が近いからということだが、それはそうだろうと思う。ここから、もう少し分析できればと

思う。もし今後調査があれば、例えば普段の生活圏にないからであれば、ではどんな生活圏なのかとか、家が近いからであれば、家が近いから図書館に来ている人達がなぜその図書館に来ているのかとか、踏み込んだ分析ができれば、図書館の利用者を増やしていこうとしたときに、ヒントが眠っているのではと思う。他の委員の意見にもあったが、インプットばかりの図書館で、アウトプットがでてきたことは素晴らしいと思う。これをどう市民の方々に納得してもらおうか。うるさくて駄目だ、という方もいるなかで、ゾーニングという工夫もあるが、狭い館内の限られたスペースでゾーニングがどのようにできるか、先行的な事例として京都市で実施できればもっと面白くなっていくと思う。もし小さな規模感の図書館で実現できれば全国の図書館も展開が可能なモデルになるのではないか。先行していろいろなことにチャレンジしていく図書館であってもよいのではないかと思う。すべての図書館ではなく一部の図書館をひとつのモデルケースとして、抜本的な考え方で、蔵書がなくてすべてデジタルにしてしまう、PDFで閲覧する、蔵書がなくてサードプレイス機能だけがあって、というような、チャレンジングな取組を行ってもいいのではないか。アナログでなければならないというような固定概念を取り払うと、そのような発想も生まれ得ると思う。

意見

アンケートは読み込めていないが、資料を読んだり皆さんの意見を聞いていて思うのは、図書館にはいろいろな可能性が広がっていて、逆に言うと、図書館に求められるものは多様で幅広すぎて、すべてに答えていくのは無理があると感じた。そうした中で何を優先していくかを、これまでの様々な取組の結果を踏まえながら考えていく必要があり、いかにして継続して実施していけるかが重要である。せっかく図書館のイメージが変わったという方がたくさんいて、親しみを感じられている方が多いので、これっきりにしてしまうのではなく、なんらかの形で規模を縮小してでもいいので、継続していくことが大事である。有効利用的な観点からいうと、中央図書館の1階の児童書スペースを閉館後に自習スペースにする取組のような、やりやすい事から実施していくのがいいと思う。多様な要望に応えていくのはよいことだが、図書館の核となるレファレンスなど、あまり知られていない司書の仕事や役割等をアピールできればいいと思う。

意見

アンケート調査や様々なイベント等、この1年間、大変だったと思う。

他の委員も話していたが情報がすごく多く、これが何かひとつの方向性になっていくということはこれから見つけていかないといけない。居心地のよい図書館ということで、空間に入ったときに自分自身がそこで時間を過ごしたいなって思えることがどのようなものなのかを、これまでの取組等から考えていく必要がある。もし滞在型を目指していくのであればそういうふうと考えていかなければならない。道筋はまだしっかりとは見えていないが、居心地の良い図書館のベスト5、京都市であれば右京中央、岩倉、醍醐中央と並んでいるが、これを見たときにすごく新しい空間やすごく広い空間とかが必須というわけではないと感じた。右京中央も岩倉も醍醐中央も雰囲気も広さも全然違う。各館の司書の工夫により雰囲気がどのようにつくられているのか。図書館には本はもちろんチラシやポスターもあり情報がすごく多い。それらをどのように整理しているか。空間の明るさであったり、利用者が感じられることというのは、必ずしも広くなくてもいいし新しくなくてもいいと実感

した。もちろん最初は新しいということは取っ掛かりにはなるが、それ以外のところで雰囲気づくりや司書の工夫により、それぞれの図書館でそれぞれの良さを創出できれば良いのではないかと。コンサルの方のまとめにもあったが、各図書館の特色を出していくことが必要になってくると思う。

意見

京都市の図書館、いろいろな取組を実施いただき本当にありがとうございます。アンケートも実施して、市民が何を求めているかを理解しないと、どのような図書館をつくっていくのかも、図書館側の一人よがりになっていけないうところもあると思うので、そういう意味でもよかったと思う。京都市の図書館は長年、他の自治体よりも遅れていると言われてきたが、委員の意見にもあったが、先進的なモデルとして、小さな図書館だからこそできること、小さな図書館でもできることを検討していくといいのではと思う。

また「アウトプットとインプット」「ゾーニング」などについても、交流したい人もいる一方で、静かに資料を読みたい人もいるなど、多様なニーズがある中、どのように対応していくかが課題かと思う。他の会議でも、読書の在り方とかの話題が出ていたが、最近では交流できる読書が流行ではあるけれども、読書は孤独になる時間を保つということも、とても大事ではないかという意見も出ていた。やはり両方の側面があり、同じ人でも今日は一人でゆっくり読書したいけれども、別の日には他の人と交流して情報を共有したいというような、いろいろな側面があればいいと思う。この狭いスペースでどれだけの多様性を保てるかという難しい課題だと思う。

Wi-Fi に関しても意見が出ていた。最近、無料ということや学習のためのタブレットということもあり、大学生はメモをとるときにクラウドを使うことが多くて、クラウドを使うためにはネット環境が必要だから Wi-Fi が必要になる。本を読んでメモするときすべてをタブレットで行うというような、世代的な違いがある。ただ確かに現状の狭いスペースで無料の Wi-Fi を導入すれば、長く滞在する方が増え、様々な人が入れなくなる問題もある。そうなると大きな図書館を造ってもらうしかなくなる。くつろぎということが何度か出ていたが、家にいるようなくつろぎというわけではなく、社会的な公共空間における、居心地の良さというのは学びとかそういうことにも深くつながると思うので「くつろぎとは何か」ということを追求できると良いと思う。

その他に、継続した取組が求められるという点については、現場の負担がどれくらいあるのか、イベントを実施するなら今の人数で足りるのかというような視点も踏まえて指摘いただいたと思う。デジタルかアナログかについては、どちらかに集約する必要はなくて、従来の書籍に良さもあるしデジタルが便利で良いこともあるので、あまりこだわらなくて良いと思う。いろいろあるが、やはり蔵書と空間のバランスが大きな課題になると思う。資料あってこそその図書館。交流空間やくつろぎスペースがあまり前面に出すぎると、それって図書館である必要はあるのか、という見え方になる。そういう意味では、資料3における、図書館は「知の拠点」から「まちの拠点」へと書かれているが、図書館は知の拠点でいいじゃないかという考えもある。「知の拠点」や「学びの拠点」が、人々の生活の中にもっと根付いていくというほうが図書館としての意義は残ると思う。今まで通りの図書館である必要はないけれども図書館がどんな理念をもって運営していくのかということが大事。そういう意味では、例えば自習問題だが、70年代80年代に問題になった言葉のままでいいのか、それとも

学びの拠点みたいな感じにして図書館資料じゃない資料を使ってもいいけれども図書館で学ぶことによって図書館の本に触れるきっかけができて世界が広がっていくみたいな仕組みづくりをするのか、あるいは公共施設として家で学習できる環境にない人達を対象とした社会的包摂を考えるのか、いろいろなことが考えられるが、一番の核のところ、理念は失うべきでない。そのことも踏まえて、ご意見を頂ければ。

回答

今の話に密接に関係してくるので、来年度の取組を先に紹介したい。

資料6 報告書新しい図書館構想に向けた「つながる。LIB×LAB(リブ・ラボ)プロジェクト」

2nd ステージ

来年度の新規事業である、リブ・ラボプロジェクトの2nd ステージとしているが、今年度の取組を踏まえた次の取組となる。

まずは「みんなが学び・つながり・広がっていく 図書館パブリック「テラス」 グランドデザイン(仮)策定事業」として、大学図書館や私設図書館、まちライブラリーや子ども文庫の他、他の文化施設や公共空間との連携や、これからの京都に必要な図書館の在り方、さらには図書館と複合化すべき要素などについての概要をまとめたグランドデザインを策定する。松井市長が就任されて、打ち出された方針に新京都戦略があり、その中のリーディングプロジェクトとして重要な施策を取り上げている。そこに「公共空間をまちに開くパブリック「テラス」プロジェクト」がある。現状の京都市の公共施設は、その目的のためにしか開いていないのではないかとといった視点で、もっといろいろな機能を複合化させたり連携させたりすることで、より公共空間を開いて、多様な市民、主体、個人、企業、NPOなど様々な主体が交流したり混ざり合うことで、新しい発想であったり気付きやイノベーションにつながっていくのではないかとという発想があり、そういった考えの下、誰もが無料で自由可以使用できる施設としてとりわけ図書館に光が当たっている状況。それを具体的にどのように実現させていくのかを、このグランドデザインで示していきたい。先ほどお話にあった図書館の大切な部分はしっかり残しながら図書館として展開していく面もありつつ、逆に、本があるからこそ落ち着けるという側面があるのであれば、本がある公共空間というものをつくっていくなど、公共施設の数を変えずにマネジメントしていくというのは今の時代難しくなっていくので、どれをどう集約していくことで、図書館の良さをしっかり残しながら、持続可能な社会にしていくのかということを描いていく事業である。居心地の良い空間をつくるだけではなくて、図書館が大事にしなければならない機能をどこにどう配置して、どう発信していくのか、ということ全体像として考えていく。このあたり、委員の皆様から、図書館のこういう機能が大事、こういうふうな図書館があってもいいのではないかと、という自由なご意見を頂いて次につなげていきたい。

次に、「サードプレイスプランの実施」であるが、今年度、中央図書館、左京図書館、右京中央図書館で試行実施し、得た知見を踏まえて、空間をしっかりと創出していきたい。冒頭に中西館長がおっしゃったが、中央図書館の参考図書コーナーにある個人用の閲覧スペースが今の時代にあれほど必要なのかというのが、ひとつの問題意識。あそこを開けた空間にしていくことでいろいろな交流も生まれるのではないかと、という視点をもって空間整備を考えていきたい。

資料7 令和8年度京都市予算案事業概要「多様な主体で創り合うまちづくりの推進」

多様な主体で創り合うまちづくりの推進というのは、いろいろな事業が混ざり合っていて、資料に「区役所庁舎等における公共空間のアップデート」とあり、先ほどの公共空間をまちに開くという視点と同じだが、整備対象は西京区役所と洛西支所である。

西京区役所の課題としては西京区に青少年活動センターがなく、西京図書館は2階建てで小さく、閲覧席も少ないため、青少年がそこで学習したり滞在したりできる状況にない。そこで西京区役所の西庁舎2階に空きスペースがあるので、そこに中高生をターゲットにした自習空間、滞在型の空間を整備してはどうかと考えているものである。ここを青少年活動センターにするのではなく、西京図書館のサテライトと位置付けることで、図書館の蔵書を置いて、自習に必要な参考書や問題集の他、小説や漫画も置くことで青少年がくつろげて、交流できる空間を作りたい。

洛西支所は京都市内で唯一、図書館と行政機能がワンフロアでつながった施設である。右京中央図書館も右京区役所と同一施設内にあるが、1階と3階でフロアが異なる。伏見中央図書館と伏見区役所も隣り合っているが棟が違う。廊下を挟んですぐ支所のロビーがあり、ロビーに本を置き、くつろげる空間を作ったり、洛西支所・図書館の前に、綺麗な樹木が並んでぱっと見た感じヨーロッパのような雰囲気の歩行者専用の道があるが、人の流れがそこまで来ておらず、バスターミナルやラクセーナがある場所から、洛西支所の庁舎までの途中にある小川珈琲辺りで人の流れが止まっている。前の通りをうまく活用しながら市民がくつろげる空間をつくれなにかというのを実際に市民意見なども交えながらやってみようというのがこの事業。サードプレイスの取組、西京・洛西の取組は、グランドデザインの先行事業として位置付けているので、これらを実施しながら、最終的にグランドデザインを描いていきたい。グランドデザインを描くならこういうことを意識するといいのではないか、こういうことも大事にすべきではないかといったご意見をいただければと思う。

最後に、来年度の図書館の方針について、説明する。

説明

資料8 令和8年度京都市図書館事業の方針(案)

京都基本構想と新京都戦略を踏まえて、次年度の方針を示すもの。重点的な取組として4つ挙げている。1つ目は、「あらゆる世代にやさしい図書館づくり」。市民の居場所をつくること、誰もが図書館に来てよいのだと感じられること、あらゆる世代を受け入れることをやさしいという言葉で表現している。2つ目が、「これからの新しい図書館づくり」。連携事業などを通じて、市民が自分たちの図書館をつくるという意識を醸成できるような取組を進めて、また、システム面でも、自動貸出など新しいサービスを検討していく。3つ目が、「電子書籍サービスなどのデジタル資料の利用についての発信」。ここにいうデジタル資料は、電子化された資料や、パソコン・スマホで閲覧できる資料に加えて、電子書籍サービスについてはこれまでも発信してきたが、電子書籍以外のデジタル資料、例えば、図書館に設置されているオンラインデータベースがあるが、この活用についても積極的に利用を促す必要があると考えている。官報やタウンページ等、紙の発行からデータでの提供になっている資料も増えてきているので、使用者が容易にアクセスできる仕組みが必要という観点から優先的な取組とした。4つ目は「京都の多様な文化を継承し創造していくための取組を

推進」。これは京都基本構想の最重要施策のひとつである京都学藝衆構想を踏まえて、広く参加できる学び合い、教え合いのコミュニティを豊かにすることを進めていくことで、突き抜ける世界都市京都の実現に寄与するもの。各図書館の取組として、この4つの重点的な取組の内容をそれぞれで実施していく。明確に区分できるものでもないので、様々な取組が重点的な取組につながっていくというイメージ。二重丸がついているものは全館で取り組む事業。1つ目の「あらゆる世代にやさしい図書館づくり」のサードプレイス・フォースプレイスとしての空間づくりに、先ほどから話題になっている自習スペースの設置がある。これは、市民の要望を踏まえたものではあるが、地域館など狭隘な施設が多い中、全館で取り組むには難しいかと思う。現状では京都市図書館では自習はご遠慮いただいているが、その中で期間や時間を区切って取り組めればと思う。新京都戦略では、「公共空間をまちに開くパブリック「テラス」プロジェクト」が謳われているので、方針もそういった内容が中心になった。図書館も開かれた施設に、という方向性。ただ、我々としては、それを通じて読書人口を増やしていきたいという思いもある。図書館の本来の機能をないがしろにしないように、バランスよく進めていきたい。新しい図書館づくりのなかに、図書館司書研修の充実による職員の資質向上がある。これは、研修等の実施により職員の資質を向上し、また、レファレンスなどのアピールができるように、いろいろな取組を進めていきたい。

意見

それでは、皆様から意見をいただきたい。図書館に光が当たっている、予算もついているということで、予算がついていることはとても有り難いことだが、これで全然違う方向に出発してしまうと後戻りができないと思うので、是非、こうしたらいいのではないか、ここは気を付けた方がいいというご意見も踏まえて、この新しい方針を軸にして良い点や、気になる点などを教えていただければ。

回答

その前に先ほどの、みんなの本棚とゆるコミボードを話題にさせていただいたので、右京中央図書館の館長代理から取組の感想を含め説明いただければと思う。

意見

みんなの本棚とゆるコミボードの取組を実施した。公共図書館では、このような取組は珍しいと思う。参加者の皆さんも熱心に思い入れをもって取り組んでくださり、中西館長にもご参加いただいた。当初どのように運営していくか、難しく感じ、本が少なくなると追加しないといけない、うまくやっていけるのかなど懸念もあったが、やってみるとうまく対応できた。機会があればまたやりたいたいと思う。新しい取組ということで職員にも刺激になり、新しい発想を持ちやすくなった。今、本棚を残して頂いているので、職員から活用方法のアイデアが出ていて、本棚、ゆるコミボード、それぞれを活用していきたいし、同じような事業の模索も行っている。ゆるコミボードだが、当初は不適切な書き込みの対処等の懸念もあったが、これぐらいのスペース・量であれば十分に管理はできた。書き込み等を毎日チェックしたが特に問題のあるものはなかった。中央にカフェと書いている絵があるが、これは職員が最初に描いたもの。それ以外は初日から書き込みが増えていって、いっぱいになったら写真を撮って模造紙に拡大して貼って、ボードはきれいに消して再び書き込みができるようにしていった。なかなか好評で、書いている人が小さい子どもさんから大人までいろいろな

方がいた。親子連れのお母さんも書いていたり、交流の場となり面白い空間となった。イベント中にイベント用の家具があったが、終了後に今まで通りに戻すのではなく、少し工夫して子どもが寝そべられるシートを用意したり、テーブルも読書しやすいものにした、椅子は今までと同じ数を用意しながら少し違うものにした。職員にも、試行錯誤しながらいろいろ考えてほしいと伝えている。

意見

令和7年度のとりくみを踏まえて令和8年度の事業が行われていくと思う。7年度の色々な取り組みを見ると、いすや机の配置などのハード面の工夫があった。ちょっとした工夫で雰囲気も変わるものだと感じた。

資料の右京中央図書館のビフォアの写真の広い一部屋があるが、こういったスペースは右京中央にしかない。閲覧コーナーと、インターネットで調べ物ができる場所(これも右京中央のみ)、そしてこの何をしてもいいというこの空間がある。開館当初、ここは「交流スペース」という名前で、図書館に来て出会った人と少し立ち話をしたりしゃべったりしてもよい場所と位置付けられていた。しかし、前向きに並んだ椅子があるだけで、新聞を読んでいるだけのそれほど楽しい空間ではなかった。今回、この一部屋がアフターの写真にあるような家具も置かれ、地域のボランティアの団体がコーヒーをいれてくれたり、おすすめの本棚ができたりして活用された。丸いテーブルやいすなどのおしゃれな家具もとてもイメージを変えるのに役立っていた。どこの図書館も予算さえあればハード面はよくできると思うので、ぜひハードをよくしてほしい。図書館のトイレひとつにしても何年もかけて順に整備されていった。やはり予算がつかないことにはできないので、予算を大事に考えて使ってほしい。

ハードは予算を使っていけるが、ソフトの面に関しては、今いる図書館の司書だけで考えて運営していくのは、それは無理だと思う。左京図書館では創設前から図書館に要望等を出したりしていた人達が友の会を結成し、開館後も図書館に提言したりイベントや講演会等を年間を通じて実施している。ソフト面は図書館を利用したり関わりのある人が、なんらかの組織を作ることで、できればいいと思う。ハード面を整えた後に、図書館職員に取組を丸投げするのではなく、自主的に集まる人達と話し合っ、運営していくことが必要と思う。

あと、先ほどすべてデジタルの図書館という意見があったが個人的には反対である。

意見

予算面に関して、予算は大事なのでありがたいと思うが、一方で「まちにひらく」ということ、多くの方に開かれるということは大事ではあるが、開くことイコールつながるではないということを前提にさせていただきたいと思う。多くの方が利用できることはもちろん大事だが、そこに来られる方全員が交流を求めているわけではない。図書館機能の中核に本があり、本を読むことは個の学びでもあるので、その個の部分求めて来られる方々をおざなりにしない、そういった意味での開くを前提にさせていただきたいと思う。みんなの本棚とかゆるコミボードはとてもいいと思った。先日、京都で長く小説を書いていて大きな賞を受賞した方がいて、その方は東京に行かれたが、その人と東京で会った時にすごく京都が好きだと話していた。やはり京都はいろいろな方々にとっての心の故郷でもあり、そういった方々の京都への思いを、例えば京都を離れた人たちに本棚をやって

もらうとか、ゆるコミボード、これをオンラインに反映できないか、ということ漠然と考えた。例えば、インターネット上のどこかのプラットフォームに随時アップしていくことで、京都市外の方々は京都の本でこういうのが懐かしかったとか、京都の人は今京都でこういうのが流行しているとか、そういうことを相互に発信して京都市を中心に市外の方々と相互に京都の図書館をPRというか、大きく存在を広げていけるのではと考えた。みんなの本棚に関しては、奈良の書店で、推したい本を棚に並べて書店に来られる学生や学者だったりお寺の方だったりいろいろな皆さんにみてもらう、そういう取組を何度かやらせていただいた。やはり京都の人たちだけではなく、京都に思いのある人たちがいろんな棚を拡張することで、その本棚がいろんな人たちに広まっていく。それは決して先ほどのつながるではなくて、これはつながることができるとともに個としての学びの相互作用で、いろいろな利用者さんに訴えることができる仕組みであり面白いと思う。一方で、これは先ほどの令和7年度の事業の話のときに申し上げるべきだったが、司書たちの負担がどのようになっていくのかといった点も気になった。例えば自習室を一つ作るにしても、今までにない仕事を担っていただくことになる。図書館職員の負担が、図書館が変わろうとしているからこそ、非常に大きくなっているのではないかと危惧している。そういったところを新規事業のなかでケアしていただければと思う。

意見

来年度の取組で、学藝衆や学びあいとか、市長の方針であると思うが、図書館は図書館の良さというものを失わないでほしい。図書館に居場所を求めるとか、そういうことは主ではない。やはり図書館の役割は活字文化を守っていく際の砦と考えている。そこに、居場所ということで、取組としてコーヒーを提供ということもあるが、コーヒーの淹れ方を勉強する所ではないので、人寄せパンダでいいのかもしれないが、本質ではない。民間でよくやっているのは、人に来てもらって何か買ってもらえるというように商売を行うが、図書館はそういうものではない。イベントがあるし図書館に行ってみた、本がたくさんあった、次は本のために行こう、とはならない。本質的には、本を通じて活字文化ということを一生涯やっているからこそ、そこに魅力を感じて訪れる、という人達をいかにして増やしていくかを考えることが大切。学びあいとかそういうことも、本や活字を、いかにイベント性を持たせて創出していか、注力していただきたい。我々もアンケート調査を実施するが、20代から30代は漢字は書けなくていい、読めなくても調べればいい、という人達が半分以上。40代50代になると半々ぐらい、60代70代は圧倒的に漢字は書けないといけなくなる。この世代間ギャップをどうしていくかは大きな課題。活字文化を守っていくという意味では、読めないから読まない、とならないようにしなければならない。

回答

当方の説明が至らなかったが、図書館でコーヒーの淹れ方講座だけを実施していたらなぜ図書館で行うのかという話になるので、図書館側はコーヒーにまつわる選書を行い、コーヒーに関心を持たれた方にそれらの本を手にとってもらったり、司書がレファレンスで紹介する時間も作ったりしたので、そこで交流が生まれた。そういう意味で、委員がおっしゃられたような「図書館の本質」は絶対に忘れてはいけないと考える。

意見

ジレンマを抱えているということはすごく分かる。図書館もだが他にも同様で、例えばお寺とか、最近では本質的なところだけでは限られた人たちにしかアプローチできないので、いろいろなカルチャーや、出会いなどいろいろな場を用意して、それだけで終わるのではなく少し仏教に触れてもらう、という仕掛をどれだけ盛り込めるかということをしている。図書館も同様に、コーヒーやイベントのついでに本に触れてもらう工夫や仕掛けが、年配の層よりも若い世代は必要である。試行錯誤しながら続けていくといいと考える。1点質問だが、ランドデザイン、大学図書館や私設図書館、まちライブラリーとの連携というのはどのようなものを考えているのか、わかりやすく教えてほしい。

回答

今年度“新しい図書館構想に向けた”市民意識調査を実施しており、図書館の構想を描くイメージを持っていたが、構想の全体像の素案を市長に挙げた際に、文化施設のなかで、学びに寄っていれば図書館で、音楽に寄っていればコンサートホールで、アートに寄っていれば美術館で、すべて類似施設であり、それらがうまく学びと交流につながっていくような開き方をしてほしい、それを図書館からアプローチしてほしいと指摘を受けた。今後どう進めていけばよいか、試行錯誤しているところ。

意見

イメージとしては分かるのだが、町衆や学藝衆、これをどのように予算まで落とし込んでいくのか。ランドデザインを作ったが、あまり将来につながらなくてイメージを描いて終わりました、というだけは避けてほしい。資料の中では大学図書館の記載はあるが、高校の図書室との連携はどのようなのか。高校生が図書館に自習室を求める状況において、高校の図書室が役割を果たせないのかと思う。一方で、高校でも司書がどんどん削られていって大変だという話も聞くので、公共図書館と学校図書館の連携についてももう少し考えていってもよいのではと考えている。

意見

この公共空間をまちに開くパブリック「テラス」プロジェクトだが、大学図書館やまちライブラリー、それから公共図書館ということで、少し話がそれるかもしれないし、このプロジェクトとして立ち上がったものではないが、京都精華大学が5年以上、一乗寺地域と連携しており、図書館司書課程の事業の一つで、図書館の司書資格の取得を目指す学生たちの一つの授業でいろいろな地域連携を実施している。

図書館司書課程の一つの授業として、これまでも連携していた書店やシェア型書店、古書店と連携するとともに、左京図書館に入ってもらい、連携した取組を行っている。元々一乗寺地域はとも本文化が盛り上がっていて、書店も多くなっているうえ、私設図書館も増えてきている。そのような中、学生が書店に出向き、その店のコンセプトや蔵書、販売している本などを参考に、インタビューを行い、そうした情報を基に書店のポスターやチラシを作成し、それを一定期間、左京図書館で掲出していただく予定。また学生たちがピックアップした好きな場所について、左京図書館でプレゼンテーション発表会を行う予定。これは左京図書館の館長にも快諾いただいているが、書

店の方々や市民の方々に来ていただき、どのポスターや発表が良かったか、感想やコメントをいただき、最終的にそのポスターを地域にある書店ということで一定期間掲出していただくようなことを考えている。図書館司書課程は必修の科目ではなくて選択必修だが、その中で地域連携等について学ぶもの。芸術系の学生が多く絵を描いたりソフトを使用したりということを主専攻として学んでいるので、そういったこともアピールしていくことを考えながら、公共空間におけるデザインの中で、おかしくないようなものを作っていくということを、デザインも含めて学んでいくことに注力している。これらは、地域連携はどのようなことができるかの一つの形であると考え。もともと一乗寺地域が、そういったものを受容する地域柄であるということが奏功している連携事業ではないかと思っているが、一つの事例として紹介させていただいた。その中で、質問だが、サードプレイスプランは、実施する図書館は決定しているのか。

回答

決定していない。

意見

では、これから決定していくということ。では、先ほど意見にあったが図書館は知の拠点、まちの拠点というところで、知の拠点に比重を置くということは確かにそうだと思う。ご存知の方も多いかもしれないが、NHKにも取り上げられた岐阜県のメディアコスモスは、市民の方々がすごく喜んでいて。実際に行ってみて本当に素晴らしい図書館だと思った。番組の放送後に、SNSでは改装する前に図書館を利用していた方々から、空間を確保するために、書棚をすごく低くして全体を見渡せるような広々として空間であるが、そのために開架されていた書籍が閉架に入ってしまう、以前は自分の目で見えて本を選択することが出来ていたのに、その数が圧倒的に減ってしまったという意見があった。もちろんあのような空間を肯定的に捉える方が多いが、市民が活字に触れていくという意味では、開かれた空間を優先することによりそのような弊害も生じうることも念頭に、我々はこういう方向性で行く、それによりできなくなってしまう部分についてはこういうふうに対応していく、というところまで考えていくことが大切だと思う。こちらを立てればこちらが立たずということは仕方ないことだと思うので、新しいことを実施する時に、自分たちの使命、図書館の使命、京都市としてこういうことをやっていくというビジョンをしっかりと確立することが必要である一方で、こぼれ落ちる部分に対して、どのようにバックアップしていくのかということについてもしっかりと考えているということを発信していくことが大事。

意見

令和8年度京都市図書館事業の方針について、細かい話だが文言を付け加えた方がいいと思うのが、1枚目のあらゆる世代に優しい図書館っていうところ、世代だけでなく背景も入れた方がいいと思う。バリアフリー法等にも触れられているが、今のままだと年代にしかフォーカスしていないとみられてしまうので、修正可能であればいただければと思う。次に、どこにフォーカスするか、ターゲットをどこに据えるのかということであるが、公共施設としては明確なターゲット設定は難しいと思うが、何か事業を打つ時はやはりターゲット設定をしっかりと決めていかないと、刺さりづらいところがあるので、そういうことも考えていくと、今回のプロジェクトで、誰をどこの層をメイ

ンターゲットに据えるのかは、明確にしていくべきだと思う。多様な主体で創り合うまちづくりの推進にも関係するが、今後予算がつかなくなった時にどうするのかの問題がある。例えば、西京における青少年の居場所づくりについて、場の創出と、運用についてもセットで考えていかなければならない。青少年の自習スペースをつくって、自習だけでない他の用途もあるということだが、そうなるとユースセンター的な機能を付加しないと、単なる場所、そこで子どもたちが勉強だけをしている空間になり、それは市長が考えているような、テラスや学藝衆のような目指しているものにならないのではないか。そこにコーディネーター役などの、そこを回していく役割が必要になるが、それを司書の力で、今の本来業務プラスその業務が加わると大変なことになる。外注し、ユースセンターとして運営するという話だとそれだけの費用が必要になるので、何かしら方法を考えないといけない。予算の話でもあるが、今からそういう部分を視野に入れていないと、作った後で形骸化してしまい、利用されなくなり、また用途転換するための予算が必要になることも起こりうる。そういったことについても検討されていると思うので、もし考えていることがあれば、聞かせてほしい。

回答

まさにそこが一番難しいところ。先ほど司書の負担をどうするのかという話もあったが、新しい事業を実施する時、この西京区役所の空間は図書館と15分ぐらい離れた場所にあり、無人の状態では放置できないため、人件費を計上している。ここには単なる司書ではなく、ユースサービス協会等で青少年のコーディネート経験のある司書を図書館の司書として配置したいと考えている。一方で、令和9年度以降、当該予算の裏付けがなく、生涯学習振興財団への委託料増額についても、市の財政当局の中ではつながっていない。いろいろな取組を実施するが、人件費が増えるわけではなく、そこが難しいところであり、しっかりと検討を進めていかなければならないと考えており、財団とも議論を重ねている状況。

意見

出口的な予算終了後の話をすると、やはり市民の方々とどう手を取り合ってやっていくのかというのは大事だと思っている。そのため、この事業を実施している間に、関わりたい人たち、一緒にそこを運営してくれる人たちをどう構築していくのか、そういうところへの予算の配分も考えておいた方が良かった。

意見

あらゆる世代にのところで、背景というのはいい言葉だと思った。ぜひ追加してほしいと思う。保健センターで、赤ちゃん健診の待ち時間のボランティアをしていて接する中に、外国籍の方が思いのほかおられる。いろいろお話して最後に全然言葉がわかっていなかったという経験をしたことがある。図書館がそこに在住し生活している方々のためにもっとサービスしてもらえたら。せめて案内のパンフレットについては、大阪では韓国語版や中国語版が常に置いてあるので、こういうものをぜひこの予算で印刷してもらったりとか、図書館に案内や説明のプレートを設置するとか、そういうことを予算を活用して実施してほしい。それから、多様な本に関わる団体との連携のことが資料にあるが、連携も重要だが、民間のいろいろな文化団体や、本に関わる団体と図書館が行うことを本当に大事にして進まないといけない。さきほど一乗寺地域の

話があったが、この地域の図書館はこうだからこういうハードの予算を出そう、というように考えてもらえたら。

回答

先ほど委員からメディアコスモスの閉架と開架の話があったが、今、山科駅前のラクト山科に山科図書館を移転させて、子どもの遊び場も併設するという動きの中で、図書館のスペースをどうするかという議論が出ている。移転なので極端に狭めることはしないが、一方でその空間にいて本と出会うことで本に手が伸びて新しい情報を得ることにつながるということを考えた時に、本を書架に背ラベルだけで並べてしまう方がいいのか、それとも、テーマ性を持たせた展示で本の表紙が見える形で本を並べることで来館された方がこの本面白そうっていうふうに取り取ってもらえることを優先するのか、皆様からご意見をいただきたい。このあたりは考え方かと思っていて、本は予約システムで予約すれば借りることはできるので、そういう意味で言うと、本との出会いということも大事していく考え方もあるかと思う。そうすると、開架の数は減るけれども、本と出会う場面を作ることも大事にしていくという視点も持ちたいと考えているが、皆さんはいかがか。

意見

開架の数が減るのは難しい問題と思う。東京のある区の中央館で、昔はとてもたくさん本、珍しい本があった。例えばオペラのスコアとかあまり普通の図書館では置いていないようなものも充実していた。ところが最近、そこの運営が委託になってしまい、委託になると空間を広げようということでスカスカの本棚になってしまい、以前はあった本がたくさんなくなっていた。職員の方に昔こういう本あったと思うが今もありますかと聞くと、その人は「いや、僕、全然知らないんですよ」とか「書庫にあると思うんですけどね」とかおっしゃる。やはりそれでは、出会いを作ることでいいと思わないと思う。もし書庫に置かざるを得ない部分があったとしても、それをつなぐ人、それができる人がいないと難しいのではないかな。ただスペースを広げればいいのかという問題ではなく、本の面出しか背表紙かは組み合わせればいいのか。実際、今図書館でも、面出しをときどき変えては新しいものを紹介している。両方の書架があればいいと考える。

意見

またメディアコスモスの事例だが、その話だけをフォーカスすると本へのアクセスが減ったのかと思いがちだったが、図書館関係者として見た時に、各コーナーに小さな面出しのコーナーがあり、3冊4冊程度の本を各コーナーで、ミニテーマ展示のようなことを館内の8カ所から10カ所ぐらい実施している。その他に、大きなテーマ展示がある。図書館関係の方と一緒に見学に行ったが、これは大変だよねっていう話をした。司書の方々もコーナーごとにこういうことをやっていくのは負担が大きいと思うが、メディアコスモスの方に質問すると「でもすごく喜んでやってくれる」と話していた。司書の方々も、コーナーであまり手に取られていない本は把握しているので、そういう本を入れ替えたりしながら、アプローチし、テーマ展示しているとのこと。開架でアクセスできる資料の量は圧倒的に減少しているかもしれないが、やっぱり工夫はされていると感じた。

意見

漢字博物館・図書館を10年前ぐらいに始めた。漢字の本をどう集めるかということで、いろいろ

な書店にリストの提出を依頼した。すると、どうやって選択していくのかがとても難しい。そのときに、みんながおいそれとは手にできないものを買おうと思い、値段順に並べてもらって高価なものから購入した。大学の先生が来てくださったときに、こういう本はみたことがない、大学の図書館にもなかなかない、そこまで考えて購入したのかと言われた経験があって、ゆくゆくは単行本や文庫本も入ってくるが、最初の頃はこんなものがあるという発見体験がないとだめだと思う。そこをどうやって演出するか、ということは一生懸命考えた。

意見

便利だから図書館に来るという方が多い現状を踏まえると、便利なら図書館に行ってみようかという方々、今まで図書館に来られなかった方々が出会う機会にもなると思うので、特に最初のうちは、今まで図書館に来なかった方が行きやすい図書館になっていただきたい。最初のうちは面出しを増やし目にして、あ、こういう本があるんだ、と。逆に言うと有名な本を面出しする必要はないと思う。初めて来る方々のための図書館ぐらいの気持ちで、最初はアプローチしてもいいのではないか。5年、10年と続いた後には、それこそ本来の図書館業務の棚に戻していく。最初のうちだけでも皆さんが親しみやすいよう、少しだけサービスして下さるといいのではと思う。

意見

追加でお伺いしたい。自動貸出をすべての図書館でできるようにする場合は、とても高額な予算が必要なのか。右京中央図書館は自動貸出機があつてとても便利。

回答

導入はしたいと思っているが、数年前に見積をとったときは数億円が必要であった。

意見

ありがとうございます。大事なことをたくさん話していただいたと思うので整理していきたい。

まず人の問題がある。確かにICタグを導入すること等で貸出等の業務が自動化され省力化されることで、例えば本の紹介や専門的な仕事に力を尽くせるようになるかもしれない。同時に、本を借りるときに少し質問したいという人もいるので、その辺のバランスも考える必要があるかと思う。司書の本来の仕事として、本を面出して紹介していくような専門的な仕事に力が尽くせるようになっていく。社会的には、情報系のスタッフを必ず一人入れて情報系のことはその専門家が担うということもあるので、そのような対応もあり得ると思う。先ほど、左京の友の会の話があつたが、左京はボランティアではほぼ女性だが、海外の例えばアメリカの友の会は、会社の経営者など多様な人が入っていて、図書館の運営についてアドバイスしたり、弁護士が著作権の相談の対応をしたりするなど、結構専門性の高い人が入っている。もう少し各地域の力を借りて、専門的な人たちにもっと参加してもらえるようにすることもとても大事だと思う。個人的には、本当は無償のボランティアで頑張ってもらうのはおかしいと思っている。司書としての専門性と、それ以外の情報系の専門性とか、そういうところの組み合わせなど、先ほどのユースセンターの話もそうだが、様々な人たちを組み合わせ一緒にやっていけるような仕組みも大事だと考える。

若い世代にどうアプローチするかについて、初めての人に図書館に来てもらえるためにはどうしたらいいかという話があつた。これは図書館が本の世界、あるいは情報の世界との出会いを作る場

としてどのように機能していくのかということだと思うので、そのあたりの工夫もいろいろあると思う。例えば若い世代は部活関係の資料のニーズがあると考え。以前、高校生が「青少年活動センターを利用して本がなくて部活の相談をするのに使いにくい。図書館にこんな場所があったらいいのに。」ということ言っていたので、図書館にある資料を使いながら部活の相談をするような場所もあっていいのではと思った。

どれだけの場所・空間を作るかという話題。そこは共有でもいいと思う。ガラス張りにしておいて、ここはグループで喋ってもいい場所、ここは青少年だけじゃなくて大人も使えるいろいろな人が使える場所など多様な空間があってもよい。個別のスペースが欲しい人たちについては、先日ある高校生に話を聞いたが、大机は集団で使いたいときはいいが閲覧席として使う時は大人の人がいるところに入りにくいから個別スペースがいいとかいう意見もあり、いろいろな座席があるといいと思った。

連携の話題については、地域連携にもいろいろな形があり、書店等と一緒に読書文化を醸成していくことも大事だと考える。MLA 連携 (Museum, Library, Archives) もあるが、MLA 連携の国際会議が何年か前に京都で開催されたと思う。実は、MLA のグループも京都にあるのでそういうところとも関わっていてもいいと思う。

あと学校図書館であるが、公立学校の学校図書館はもう少しなんとかしないといけないと思うので、今後考えていただければと思う。

事業の方針について。あらゆる世代に優しい図書館づくりということで、世代だけではなくいろいろな人たちにアプローチできることもとても大事である。また、文化を醸成するために図書館がどういう役割を果たせるか、活字文化を維持してだけでなく、もっといろいろな文化にどう関わっていくかという役割も大事である。最近、漢字が書けなくてもいいという人が多いという話があったが、最近では基礎学力を身に着けることの見直しが図られているので、そういう意味でも、書けなくてもいいということはなく、図書館が、何ができるのかを考えていくことが基本として必要である。

単年度の事業をどうやって次につなげていくのかは絶対に大事なことなので、無理のないよう10年後を見据えたやり方を考えて頂きたい。

閉会の挨拶

それでは皆様ありがとうございました。皆様からいただいたご意見、ご提案を反映して検討を進めていただくようお願いする。いつもは中央図書館長をお願いする方たちであるが、市長にもぜひお願いしたいと思う。